

佐藤堅司博士を偲んで

弔 辞

駒沢大学総長

保 坂 玉 泉

佐藤先生突如の訃報は吾駒沢大学全学教職員、学生同窓一同にとり非常なる衝撃でありました。然も夫れが今迄先生が手塩にかけられた教え子たちの芽出度い卒業式を終えての阪逢、夫れも御自宅間近の駅構内での御奇禍であると云うことをきいて私はおどろきと哭しみのために全く身の震う思いがいたしました。先生と本学との御縁は古く戦前にさかのばりますが改めて専任教授として御就任願ってからでも既に十二ヶ年……そのゆたかな学殖と高潔な御人格と壮者を偲ぶ国士的情熱とを以って学生を指導鋪育される学生たちの信望を一身にあつめておられたのでありますが、来るべき新学年度からは再び本学の教壇に風格ある先生のお姿を拜することが出来ぬかと思えば全く感慨無量なるものがあります。先生は御趣味も亦豊富で特に書道に造詣深く、又短歌は素人の域を脱し生涯に十万首作ることを念願しておると云われていたが恐らくはそのお望みも既に果されているのではないかと想像しております。折りにふれ先生から示されたお歌を拝してもよくお人柄が判りますが我々出家の仏道に志し禅を行ずる者も遠く及ばぬ悟道の境致に達しておられたことが推察されます。私は大学としても、学界としても尊い惜しいお方を交通事故と云う不慮の災いのために失った事は実に痛恨の極みで哀惜の情に堪えない次第であります。本日先生の御葬儀に際し謹んで蕪辞を述べて弔詞といたします。

昭和卅九年三月廿一日

弔詞

去る三月十五日駒沢大学の卒業式が行はれ、君はいつものように、私と並んで講堂に座を占めてゐました。式は型の如く進行して、優等生に賞状や賞品が渡され、来賓諸君の祝辞があつて校歌の合唱で式は閉じたのです。この間に君は、小声で「今年は歴史科に優等生が出なくて寂しいなア」と、私の耳もとで囁かれました。

君と私とは大正四年九月十一日当時東京帝国大学と言はれてゐた今の東大史学科に入学した。君は早稲田大学から西洋史学科へ、自分は一高から東洋史学科へと籍を置いた。各史概説や、語学の時間は共通であり、史学研空室は東洋史と西洋史とは共通であつた關係上、直ぐ懇意になつた。同級中に後に東大教授になられた平泉澄（日本史）、山中謙二（西洋史）、朝鮮大学教授の藤田亮策（考古学）の三君もゐた。三年は夢のように過ぎて了つた。君は東大卒業と同時に、大正八年四月陸軍中央幼年学校教官になられ、同十年陸軍士官学校教官に榮転され、専ら陸軍の人物教育に従はれてゐた。これは大学在学中に、西洋史の泰斗箕作元八博士の講義、「ナポレオン戦術史」に興味を持たれたのではないかと愚考致します。その影響で、君は後に支那の戦術理論家とも申すべき「孫子」の研究に着手され、遂に大成されたのであります。従来「孫子」研究の上に、新見解を以て立論されてゐることは、中国並びに日本に於いて「孫子」研究の上に、歴史的に一大金字塔をお建てになられた功績は、実に永遠に消えることはありません。この論文で文部省は、君に文学博士の称号を下されたのであります。

駒沢大学が未だ曹洞宗大学と呼ばれてゐた時（大正十一年頃）、その高等師範部地理歴史科に招ぜられて、その四月から御就任を頂いたのであります。勿論使者の役はこの自分が引受けました。

昭和十三年四月、予科士官学校教頭に榮進され、翌十四年五月願に依り、陸軍教授を免ぜられ、退職後は専任駒沢大学教授となられ、今日に及ばれたのであります。

私の方は大学卒業と同時に今の東洋文庫の前身岩崎文庫に採用頂き、今日に至ってゐるのであり、東西両洋に互る東洋関係の図書蒐集においては、世界的存在である関係上君が孫子研究に熱中の頃、いささか助言したのは、レファレンスといふ職務を果したに過ぎないのであります。

私にとっては腹の中をさらけ出して話合へる御方のお一人でした。何んでも忌憚なく、卒直に言ひ合へる親友であり、心の友でもありました。お互に齒に絹を着せず話合へる友でした。素肌に触れ合える朋友のお一人でした。

昨年末か今年初頭か、「自分は毎日往復の電車の中で、下手なりに、和歌を作ってノートしてゐる。そのうち十万首を越したら印行する積であると言はれて、手帖の中から二三を見せて下さった。

前に述べたやうに、十五日の駒沢大学卒業式には私の右に座を占めてをられました。その時、小声で、今年は歴史科に優等生の出なかったことを慨嘆してをられ、式が終つてからか、或は帰途の車中でか書かれたものと見え、急な思もかけぬ訃報に接して、十六日に弔問に参じた時に、令夫人否末亡人春枝様から、御遺骸着用ポケットから出た例のノートを見せて頂きました。

歴史科の優等生なき淋しさを式に列してつくづく思ふ。

九十の高階禅師朗々とながき味ある訓示を賜ふ。

これは君の悲しい絶望となつて了ひ「歌日記」は永久に主人を喪つて了つた。悲愴の極みであります。

最後にこんなことを申上げては、甚だ非礼であるかも知れませんが、御令嗣憲太郎様が、印行出版と御関係あることでもあります故、この歌集を是非活字化して、御仏前にお供え頂くことが何よりの御供養になるのではないでせうか、最後に英霊よ、静にその時をお待ち下さい。友人同僚を代表して弔辭に代へさせて頂きました。

昭和三十九年三月二十一日

佐藤先生を憶う

学監 藤田俊訓

私が初めて佐藤先生にお目にかかったのは確か元学長の山上曹源先生のお宅だった。何かの会合があり隣り合せに坐っているいろいろ話を承ったが、極めて丁寧で物静かで如何にも善人らしい好々爺に想われた。山上先生も既に数年前お亡くなりになったが、佐藤先生が今年三月大学の卒業式の販途交通事故でお亡くなりになった事は何としても残念でならない。昭和卅三年三月私も大学へつとめる事になり、時たま廊下などで講義に行かれる先生の古色蒼然！と云っては矢礼にあたるが、村夫子然たる猫背のお姿をお見かけする程度で、さう余りお話を承わる機会もなかった。所がいつかの教授会で夫れも何の問題だったが忘れたが、先生が卒然起って白髯を扱きながら滔々と大きな声で自分の意見を切り出された事がある。その時の先生は正に猛虎が山月にむかって咆哮するの概があった。私は一見極めて柔和慇懃^{いんきん}なあの先生には内に烈々火を吐く青年の様な情熱を秘めておられる事を知って急に先生が好きになった。夫れからは機会ある毎に先生のお話を承わる様にしたが、先生の御趣味は非常に広く且つ深く何でも知っておられるのには驚きもしたが感心もした。

先生は酒をたしなまれたが、いつか酒をつくるには水が一番大事で杜氏水を選び、水の良否によって酒のよしあしが決定づけられ

ると云うことを、岡山か広島あたりを舞台にそれこそ微に入り細に入りって克明に書かれた小冊子を送って貰った事があるが、夫れを讀んでるうちに何となくその美酒を一杯傾けたい気持ちになった。物の本によられたものか、夫れとも先生の物好きから自分で研究されたのか知らんが大変興味深いものだった。

先生の短歌は天下周知の事だが先生は又書道にも非常に堪能であられた。数年前「象水」と署名した先生御直筆の習字帖「四字訓」をいただいたので、暫く毎朝稽古していたが先生の字はきれいで細そり優しいがどこか強靱^{じん}な丁度先生の風格がそのまま書の上に丸出しになってる様な感じで、仲々真似の出来ない近寄り難いものなのでとうとう願い下げにしました。

先生は生涯に十万首の歌をつくることを念願にしておられたと云うが、実際にはもう十万をはるかに突破しておられたのではなからうか、私なども若い頃歌が好きで歌らしいものを作ったが、以后何十年と歌を作ったことがなくつくらうともしなかった。所が今度欧米旅行をしたら心もノンビリだったが、珍らしいものを見たり聞いたりしていろいろの感興も湧き久しぶりにそれこそホントの腰折れがいくつか出来た。昔から作詩如放尿と云い私などの歌もたまらんと出来ないのだが、先生はいつでもどこでも自由自在に作題された様である。禍にあわれる直前まで、先生はどんなに忙しい時でも常に心のゆとりを持ち、年を取っても常に若々しい血をたぎらせて、四時の変移や周辺の動きを敏感に感受しておられたからああした歌が出来たのだらうと思う。先生は惚容^{ぼくよう}迫らず古禅僧の様な風格を持っておられたが、物される歌も私などはるかには及ばない高い悟道の域に達しておられた様に拝察される。

先生は元陸軍士官学校などで戦史や兵学を講ぜられ所謂武学が専門だったが、本学教授会に提出された学位論文の「孫子の思想的研究」は先生が多年の蘊蓄^{うんちく}を傾けられた浩瀚^{こうかん}なもので、教授会でも審査する審査員の選定に困った種のすぐれたものであった。併し残念な事？に先生は此六韜三略の兵学をご自分の私生活には活用されなかったと見え、お暮しは極めて質素で清貧^{せいへい}清潔であられた事も先生の人柄が偲^{しの}ばれてなつかしい。

先生は此三月お亡くなりになったので勿論今年になって一度も大学へお姿を現わされることなかった。楽しんでおられた体育館の落成式にも、又保坂先生と私が仏書贈呈国際親善使節団として二月近くの欧米の旅から帰って来た時も喜んで出迎えて下さる筈^{はず}の先生のお姿を拝することは出来なかった。然し私は何だか今でも校舎のどこかで、廳々^{ひょうひょう}として片手をあげて講義から帰って来られる先生を見かけることが出来る様な気がしてならない。(三九 一一三)



昭和36年6月28日静岡洞慶院庭前にて



昭和三十四年十一月三日
千葉県雄蛇池の畔にて

佐藤君との交遊

宮崎 晴美

人間の生涯にはいろいろな交遊関係があつて、それらの間には、ある時は喜しく、ある折は悲しく、ある時は可笑しくもあり楽しくもあり、ある場合は癪に障ることもあるというように、なかなか面白いものだ。また、その交遊の間にも竹馬の友があり、クラスメートがあり、同学の士があれば遊興の徒もある。また、同じ職場の友もあれば、同じ趣味の交りもないではないし、更に飲み友達もあるという按配で、実に千差万別の観がある。さて佐藤君との交遊

は、このどれにあたるであろうか。

私が佐藤君を知ったのは、大正も震災前という数十年も昔の話。

共に陸軍教授として市ヶ谷台の上に在った士官学校の子科に勤務していた頃、東大出身の元気のよい若手教官連と青年将校連とで結んだ目白会、それは親睦団体ではあるが、その裏には、旧い殻に閉じ籠った陸軍の教育に新しい息吹きを与えようという意気込みを含めたものであったが、それに加わったのが、その初めでもあろうが。然し、それは世の常の交りであつて、そう深いものではなかつた。

間もなく、私が川村学院の裏手にあたる目白に住むようになると、君の新居にも近くなったので、よく往復したものだ。そして、スキ焼どなを馳走になった時などは、若くて美しい女子大卒業の春枝さんとの新婚生活に、まだ独り身の私を羨ませることが屢々であつた。爾来今日まで君との交遊が続けられて来たので、憶えば随分長い間柄ではある。その間、何等の利害関係があつて結ばれた訳でもないければ、また同じ趣味の好みでもない。同じ職場の友といつても、それは昭和に入つてからのことであつて、それも戦後のことと言つてよい。では二人を結んだものは何か、もし、強いて言うならば、飲み友達とでもあろうか。然し、それもお互に余りいけそうにない、せいぜい清酒の二、三合か、ビールの二、三本。この程度の酒飲みでは、いくら酒を嗜むといつても、世の謂ゆる飲み友達の類には遠いものがあるようだ。では他に何があるだろう。それは恐らく、そうした有形のものよりも、何となく人を惹きつける君の天成の人柄によるものが多いからではあるまいか。あのだことなくしみりとした親しみ易さが、多くの人々を魅惑もし、また、人から愛されもしたであろう。言うならば、君の性格は温和な学者肌ではあ

るが、それ程に冷たいものではなかった。真面目そうな顔つきをしていても、なかなかユーモアに富んだ話を、時には織りまぜて、相手を思わず失笑させることがないでもなかった。いや、真面目な真剣な話も、和やかな笑の裡に聞かせるという、一種の話術を持っていたようにも思われた。だから、君の話は、それが通り一遍の世間話でも、いっこうに飽きない。だからと言って、落語家のようにでもなかった。もっと上品で、手振りなどを混ぜて話すところなど、ある種の芸風とも言つてよいぐらいで、ありし昔の坪内逍遙博士を想い起させないでもない。君の教室における態度は見も知らないが、日常にあげる談話は、教壇に見られた逍遙博士のそれを地で行つたようであつた。逍遙博士には、面と向うと謹厳そのもののような態度が見えたが、教壇では、真面目な裡に、身振りや手振りの面白い、ユーモアな講義が聞かれて、それが早稲田大学の講壇を賑わしていたようだ。佐藤君も嘗ては早稲田に学んだことがあつたので、或は博士の話術に感化されたのではあるまいか。今にしては知るよしもないが。とにかく人に懐しさを感ぜさせるある物があつたことは確かである。そこが、一度交りを結ぶと離れられない奇縁ともなつて、四十数年という長い交遊が続いたのであつた。尤も、私は都を離れて、福岡とか、広島などの地方巡りに十年に近い年月を過したから、その間は跡絶えがちにならざるを得なかつたが、昭和八年の秋に、再び都に住みつくようになると、以前にも増してその関係は濃くなつて、遂に家族の往き来にまで進んで行つた。その交遊でも特に思い出として忘れることの出来ないのは、九十九里行の一日であろう。それは三十四年のある日、われわれ夫妻が、令息憲太郎君を煩わして、君と千葉県を横断し、更に九十九里町にまで遊

んだ時のことである。自動車のドライブもさることながら、千葉の十和田湖とも呼ばれる雄蛇ヶ池の展望から、九十九里浜の素晴らしき絶佳を初めて味つた印象は、私の脳裡から永久に離れることがない。だから、その日に物した拙い歌を、歌好きのが靈前に捧げてその冥福を祈り、かつ文化の日に相応わしい清遊の記念としよう。

涯知らず続く白浜九十九里かかる眺望ながめのまたもあらめや
立ちて消え消えては又も立ち騒ぐ九十九里浜潮騒白し

雌雄の潮騒白き九十九里これぞ天地の神の御業わざかも

はるばると君と遊びし九十九里昨日の如も忘らえなくに

(八月廿八日記)

追 想

小山 軻 絵

人は時として特異なる体験に遭遇する事があるが私の佐藤さんに対する追憶はこの世にも稀なる事件と不可分離に結合されてをるのである。これは一面悲しき事であり不幸極まる事ではあるがそれ又佐藤さんの人間性と心情とが深く強く私の心を支配するのである。私は先づ其の出来事に就て略叙したいと思ふ。

私は停年の為め今年の三月駒沢をやめる事になつて居たので三月十四日教授会后皆さんは送別会を開いて下さつたが其際佐藤さんは

お見えにならなかった様であった。翌十五日は卒業式の日であったが式后いつもの如く佐藤さんと一所に渋谷迄帰って来ますと佐藤さんは突然一寸一人ぎめの様な強い語調で「今日は是非とも来ていただきたい所がある。心ばかりの送別会をしなければならぬから、と例の如く少し前かがみに手を大きく横にふりながらすたと地下鉄の方に登って行かれるので私は驚きながらあとについて行く私の知らなかった東横のグリーンに案内され御馳走になりしばらく閑談。「淋しい事だがこれからは中々お目にかれないでせう」などしんみりと名残を惜まれましたが、それでも代々木でお別れする時には「今日はゆっくり角力のテレビが楽しめます」など如何にもほがらかな御様子でした。

翌日つかれたせいもいかいつもよりおそく新聞を手にし、何の気なしに開いて見てをるうちに、踏切番の不注意の為め駒沢の教授遭難と云う見出しにハッと引きつけられ読む中に、言表し難いショックと複雑極まる感傷に打たれました。早速千葉の御宅にかけつけ奥さんに弔詞と同時に昨日の事を御話すると「左様だそうでしたね」と既に御存知の御様子、佐藤さんと最後に語り最後に見送り惜別したと信じて居つたので一寸意外に感ぜられましたが、それは電車で物され数首の（佐藤さんは十万首を目標に毎日かなりの数の歌を詠まれる習慣でした）最後に退職の（小山博士と東横のグリーンに於て別れをしむ）と手帳にかき残された為めでした。佐藤さんとは駒沢以来の御交際でしたが、佐藤さんは更に気のけない世俗的の關係を超え胸襟を開いて語りうる稀なる人格者でした。独逸人が自己の特色として誇る *treue und Gemüthlich* の二つは正に佐藤さんの性格を特色づけるものですが、それ丈でなく、是を包越するに東洋

流の心情を以てした様に思はれます。

最後に前述の体験に織り込まれた私の感慨の一部を述べさせて置きたい。昔より吾々は「一樹の蔭一河の流」「袖すり逢ふも他生の縁」なる語により深き人間の交感を養って来たが、恐らく現代人には他人事になって終つたであろう。私は然し今度程現実感をもって此等の語を味つた事はないのである。不可思議の因縁によりこのよき人と交り、まして其の最後の悲運を見送る最後の人となつたとは——何たる因縁であろう。私は何人にも劣らず深く深く佐藤さんの冥福を祈らざるをえないのである。然し一面私の感情は此の仏教流の諦観に盛り切れない方面を蔵してをる。それは世界一の富強を誇り世界一の幸福者を以て自任したクレイサス王に対して嘗つてソロンが語つた運命の事である。分をさき秒をさきで瞬間に人を捕へ去る運命である。遅かれ早かれ粉車の如くあらゆるものを砕き去る運命の力である。私は諦観と共にこの運命の力を感じるをえない。それで私は高等学校時代に暗誦したシラーの句をもって此の追想を終りたいと思ふ。

“Wehmut ergreift mich und die Seele blutet, dass
Irdisches nicht fester steht, und das Schicksal der
Mensch heift, das Entsetzliche, so nahe an meinem
eigenen Haupt vorüberzieht.”

佐藤先生と私

竹内直良

昭和四年頃私が金沢に暮していた当時、友人の薦めで佐藤堅司著

西洋文化史講話という本を読んだことがある。その頃は概説風の西洋史の参考書は瀬川、箕作両博士の著書の外には二三に過ぎず、ましてや文化史と名づけられたものは極めて少く、大正十四年に大類先生の名著西洋中世の文化が出版され従来の政治史中心の外に漸く文化史方面にも眼が向けられた時であったせいもあったが、特にこの西洋文化史講話は内容が斬新なので非常に面白く読み通したことを覚えていいる。然し当時私は未だ著者の佐藤先生がどんな学者か一向知らず、後昭和十六年市ヶ谷の士官学校の教官になった時、既に同校の教頭を辞めておられたが初めて先生の風貌に接し以後屢々お話を承る機会を得たのであった。

大東亜戦争当時はお互に音信不通のままに過ぎたが、戦後占領軍の命令による追放令が出て佐藤先生もその中の一人であることを知った。そうしてこの追放令により過去の優れた学者達が続々と教壇を退き、之に代って米軍の占領政策に追従するような風潮が学界思想界を風靡して行くのを苦々しく思った私は、雑司ヶ谷の立派な邸宅は戦災のため焼失し又収入の道もとだえて万事不如意のうちに千葉県の片田舎で農業生活をして居られる先生の御日常を聞いて胸のしめつけられるような感じであった。それでこの頃から先生と再び

親しくお話する機会を作り、拙宅へおいで下さったり私も千葉のお宅へお邪魔したこともあったが、こうした失意の中にあっても先生の歴史研究は相変わらず続けられ、間もなくさきの西洋文化史講話(ルネッサンスまで)の改訂版古代中世近世の三冊が昭和二十三年から二十四年にかけて出版された。追放解除後駒沢大学教授になられたが、講義が終わった後拙宅へお寄り頂き夜更けまで語りつづけたことも屢々であった。

右の様なわけで私が先生と御交際を頂いた年数は相当に長いが、私が常に感心したのはどんな場合でも先生の悲観された顔は一度も見ることがなかったということである。追放中でも先生は常に明朗だった。「百姓をしているから食うには困らぬが勤められぬから物を買うにも樂ではない」と云われ乍ら一向くさっておられぬ。田の泥を鍬で掬って畦を作るその技術が如何にもむつかしいかと慣れた百姓の手つきの説明が始まる。と思うと武芸の極意の話になる。何時の間にか歌舞伎の話になり、逍遙や鷗外の作品に転ずる。その度毎に益々熱が入ってくるのである。先生は背中が円く少々前かがみだが興が湧いてくると酒盃を膝もとに置き忘れた左右の手が巧に活動する。五本の指がきちんと揃ったままそれが或時は百姓の鍬になり、或時は宮本武蔵の二刀になり、歌舞伎役者のしぐさになったかと思うと二本の指がぱっと跳ねて手裏剣に変わる。まことに鮮か何ぞ時しかこちらもその勢に吞まれてしまうのである。かつて歴史学研究室で卒業生の送別会が行われた席上、私は「人間は一生に一度や二度死ぬ程の辛い目に遇うことがある……」と云った。会が終わった後いつもの様に渋谷の喫茶店で夕闇の迫るのを忘れて二人であれやこれやの雑談にふけた時、先生「曰くさっきの会であんたは人間

は死ぬ程辛い目に云々と話されたが私はこの年になるまでそんな経験は一度もないよ。」としてみるると戦災や追放などの苦境に落ちても先生はあまり神経を病まねなかつたらしい。ここに先生の明るく性格を知り得て改めて尊敬したのであった。又とかく人間は年をとると若い者の話を聞きたがらず自分で独り勝手に喋りつづけるものであるが、先生にはそれが無い。どんなつまらぬ話でも一応耳を傾け丁度呼吸をする様な速さで相鎧を打つ返事が出来る。話上手に聞き上手というのであろうか。これは学ぶべきことと思っている。

先生が好んで和歌を作られたことは先生を取りまく人々が皆知っているところである。今年の正月に既に五万六千首以上に及び生涯に十万首を目標にしておられたから希望は頗る雄大である。私も数首頂いたがこうして毎日忘れずに何首かを作って行くという根気が常に人生に希望を与え、日常生活を明朗にした原因であったと思われる。昨年春私が欧州に外遊する時イタリアへも旅することを知て先生が下さった歌は

アッシジの聖者のあとをとぶらはむ君をしたひてわが影は行くであつた。アッシジは予想した通りの静な落着いた美しい町で、ここに私は夏の日を三、四日過したが、遙か祖国の先生を想い生来初めて作った怪げな三首

アッシジの御堂詣でてはるかなる君すこやかにいませとぞ祈る
チマブエのうつせしといふアッシジの聖者の瞳清くうるはし
貧しくも清く生きよと諭されし聖者の教わが胸をうつ

を先生に送り、先生に喜んで頂いたのも今はなつかしい思い出がある、

この数年来、学問のこと、人生のこと、その他について特に親し

く種々お教を頂いた方々、即ち藤井甚太郎、板沢武雄、佐藤堅司三先生、更に近くは保坂玉泉先生の御逝去葬儀を経験しているが、こうした日本の学界に大きな足跡を残した碩学がぼつりぼつりとこの世を去って行かれるのを見て、諸行無常、是生滅法ということは充分に承知しておりながら無限の淋しさを禁し得ない。特に佐藤先生の場合、一昨年入院加養後全く元氣回復されこれから十万首完成と意気込んでおられたのに不慮の災難で突如この世を去られたと思うと胸の痛む心地がする。だが先生には孫子の思想的な研究を初め数多くの著書がある。これらは皆後学のための良き指導書となるであろうし、又それによって先生の生命は永久に続いて行くであろう。先生が亡くなられてから今日で丁度半年たつが今も尚どこかの途でふつと先生の温顔に接するのではないかというような気になりながらこれを書く。

(昭和三九 九 一五)

佐藤先生を憶う

増 永 靈 風

(教授文博)

佐藤堅司先生は私の最も尊敬する恩師である。学生時代私は先生の西洋文化史の講義を受け非常に興味をおぼえた、右手の指をひろげて左右に振っての講義はすばらしかった。特にダンテの講義は得意中の得意であった。

陸軍士官学校の教官をし、武学研究所の所長であったから、終戦後は追放のうきめにあわれた。先生はその頃しょんぼりと私宅を訪れられた。その靴下は粗末で穴があいていた。私は先生のこのみずぼらしい様子を見て追放解除後は駒沢大学で講義をしてもらうよう岡田学長に進言した。先生はよろこんだ。その日の糧にも事欠くほどであったから大法輪の石原社長に紹介して原稿をのせてもらった。その稿料を得た時の先生の顔はかがやいていた。その後西洋文化史に関する書物も相ついで出版された。私は先生に孫子と独逸のクラウゼツツの戦争論と比較研究されるようすすめた。それが「孫子の思想史的研究」となって結実した。学位論文を書くことをすすめたところよろこんで孫子を書こうといわれた。先生は話術に巧みであり、また文章も頗る美しかった。それはその人格とあいまって聞くものや読むものをすこぶるよろこばせた。また先生は毎日和歌を沢山作られた。その数はゆうに三万以上に達したのであろう。私が独逸へ行く前も西洋文化の特質についてしばしば質問した。ルネッサンスに非常に興味を持たれ、ダンテの神曲に精魂を傾けられた。ヘレニズム、ヘブラズム、ローマ人の遵法精神ルーテルの宗教改革などについてくわしく話された。また先生の人物評は実に面白かった。信長と秀吉それに家康を比較しての論評は、実に堂に入っていた。また先生は相撲がすきであった。神風の解説などに興味をもたれ、実に適評であった。私が独逸に行く前、わざわざ私宅を訪れ美しい花瓶を贈られた。また書をよくし、長編の詩を書いて下さった。書には私も興味を持っているか先生の書には何ともいえぬ雅味があった。孫子は単なる兵法でなく、人生観であり、処生術であるとも強調された。戦時中、私も孫子を読み、共鳴するところが多かった。ク

ラウゼツツはこれをどう見たかについてもなかなかうがった批評をされた。孫子の思想史的研究は非常に売れた。

東大の国文を出られた息子さんは講談社につとめておられた。大学の文化講演を聞いてはいろいろ批評された。小野光洋氏の挨拶には舌をまかれた。先生は丘丈岡田をすこぶる尊敬し、私の救い主だとよくいわれた。先生の歴史という書物はなかなかの傑作である。

私はこの書からも得るところが頗る多かった。歴史の本質についてもよく話された。津田史学には敬意を表されていた。その独創的な歴史観についてもしばしば話された。先生ほど親しみのある方はなかった。先生あるところほほえましい雰囲気につつまれた。いわば人徳の然らしむるところである。先生の不慮の事故死をきいて私は愕然とした。宮崎先生、岩井先生、佐藤先生のトリオは私に限りなき喜びを与えてくれたのに、今や先生はない。講師室に先生のないことは一入淋しい感じがする。今は極楽で和歌をつくってたのしんでおられるであろう。

佐藤堅司先生を憶ふ

玉村竹 二

三月十六日の朝刊を何の気なしに開けたとたんに、眼に飛込んで来た活字を、何度となく確めたが、矢張り読違ひはなかった。それ

に写真までが掲げられてゐるのである。佐藤先生が、御宅のそばの踏切りで、総武線電車で刎ねられて亡くなったのは、事実であると認めざるを得なくなった。三月十五日といへば、駒沢大学恒例の卒業式の日である。時刻から見ても、その帰途に奇禍に遭はれたことになるのである。私は直ちに、たしか昭和三十一年の卒業式で、先生が、祝辞を述べられたことを、すぐに聯想した。御拝前の軽妙な諧謔に、一くだり毎に、一同が洪笑爆笑を繰返し、大変賑かに晴々とした気分にも包まれた式となったのを覚えてゐる。八年後のその同じ卒業式の日には、これはまた打って変わった悲しい出来事がおこる、うとは、尤も承るところによると、今回停年退職をされることになった小山鞆絵先生と、渋谷の契茶店で、お茶を召上りながら、徹談をされ、その後間もなくの出来事であった由であるから、先生御自身も、その直前までは、八年前の卒業式の際の如く、愉快な御気持で家路に就かれたのであらうに。

停年といへば、先生は、珍しくも、二月二十九日、東大の史料編纂所で催された、私共の理事をつとめてゐる会——日本歴史地理学会——に出席されたのである。かつては毎回のやうに出席されたが、ここ数年健康を害されてからは、殆どお姿を見なかつたのが、本当に久しぶりでお見えになったので、正式の講師たる桃裕行氏の講演の終了後、岡田章雄理事の発議で「久しぶりですから、先生ひとつ飛入りで」と随想のお話を願つたのである。そのときに、先生は、例によって日課の和歌続詠のこと、それが令孫の興味を惹いてゐるお話などされたのち、あと二年で駒大を停年で辞めるからと漏らされた。一兩年以前の御病氣のときは見違へるやうに、お元気に見うけられたので、それは惜しいことだなと心中ひそかに思った

が、その二年をも待たず、この世を中途退職される仕儀となつてしまつたのである。

先生にはじめてお目にかかつたのは、恐らく私が学生の頃である。たしか昭和八年春の史学会大会の国史部会が、上野の精養軒で行はれたときである。その頃の部会には有馬成甫、三上義夫、鳥羽正雄の諸氏といった毎回必ず研究発表をする御常連があつた。先生は右の諸氏程ではなかつたが、よく発表される方で、この年にたしか部会の演壇に立たれたと記憶する。私は史学会からたのまれた臨時雇で、講演要旨の筆記をしてゐたと覚えてゐる。それで先生の兵法の研究家としてのお名前とお顔の印象を深くしたのが、そもそのはじめである。しかし直接お話をするやうになつたのは終戦後のことであつた。

終戦後間もない頃、昭和二十二年の秋かと思ふが、例の日本歴史地理学会の例会を東大の山上会議所で開いたときである。丁度私が講師に当り、五山禅僧の隱遁生活について、拙いお話をしたことがある。そのときに、どこかで見たことのある背の高い瘠せた紳士が出席された。そして、同会の理事である桃氏や田中久夫氏と、なれなれしく話をされてゐるのである。そしてその紳士が、「今日は隱遁のお話があるといふので、つい身につまされて聞きに来た」といはれた。それがのちに田中氏から聴くと、佐藤堅司先生であつたのである。当時先生は、不幸にも追放のうき目に遭はれ、否応なしに隱遁生活を強いられて居られる時であつた。それ故にさきの御発言に及んだのである。この席上で、桃、田中両氏から紹介され、はじめて先生と親しくお話をするやうになつたのである。その後しばしば歴史地理の例会にも見えたので、雑談を交し、また御研究を伺ふ

機会も次第に多くなった。

昭和二十五年、はからずも岩井、丸山両先生の御推輓で、秋が駒沢大学史学科の講義をお手伝するようになった。はじめの二三年は、まだ先生は、学校にはお見えにならなかつたが、昭和二十七年、追放が解除になって、駒大へ復帰されたのである。それ故、一層の御近づきとなり、講義の日は異つたが、或は入学生生の歓迎会、卒業生の送別会、または謝恩会、或は卒業論文の口述試問の日、さては見学旅行の際などに、お顔を合せることが極めて頻繁となり、その上、歴史地理学会の方でも、相変らずお目にかかるので、本当に先生のお人柄に触れることが出来た。

先生は、一見飄々乎としてゐられるが、どうしてどうして、その眼力のするどいこと、人を見る目の確かなこと、ユーモアにあふれた一面の外に、私が感服するのはこの一事である。常に学生をよく観察され、各学生の学業の優劣は勿論のこと、性格のすみずみにいたる迄、詳しく承知して居られ、折にふれて私共に寸評をされるのが、誠にびたりと当ってゐて、舌を巻いたものである。例へば「あの学生は百点はとれないが、八十五点は必ずとって来るやつだ」といった調子である。先生によって長所を見出され、その鞭達によって、大成した卒業生を、私は何人か知ってゐる。誠に教育者として、すぐれた眼識をお持ちであつたと、今更ながら敬服する次第である。

私事で恐縮だが、私は先生から買彼られてゐたやうである。大分御信用があつたようである。それは誠に添わない次第で、身に余る光栄であるが、それは恐らく、私が田中久夫君の友人であるといふことから来てゐると思ふ。田中君は千葉大学の先生で、同大学で丸

山先生と職を同じくし、また船橋に住んでゐるので、佐藤先生と同県、しかも地域的にも近く、田中君は先生のお宅に参上することがしばしばであつた。両方共に、極めて純粹な精神の高揚を理想とする共通点があるために、大いに肝胆相照してゐたやうである。その友人であるといふので、私にも御信任を傾けられたのであるが、私は田中君からは憐みを以って導かれる友人であり、到底高尚な精神を合せず、極めて鄙陋矮小な根性のものであるので、実のところ、その御信用に辜負してゐたのを誠に心苦しく思ふ次第である。

お通夜の晩には、桃、田中両氏と共に、お宅に伺つたが、御令息御令嬢から、例の十万首念願の歌日記のノートを見せていただいた。そのうちには、昭和三十七年、私が十二年間の駒大の勤めを終へて退職し、お世話になつた御礼の御挨拶に、その年の七月に参上した時に詠ました御歌があり、私の名前が載つて居たし、また、その後三十八年秋に、田中氏が参上した席上で、私がただ今熱中してゐる円覚寺史執筆のことが話題に上つたと見え、それに関する御歌も見えたのは、誠に恐縮汗顔の至りであるが、常に何人をも分けへだてなく、温情を以て接せられた先生の御人柄を示す一端として、有難く信受奉行する次第である。

先生逝いて既に半歳、いま『駒沢史学』誌上に先生への追悼文を求められたが、ただ心氣粗喪して文を成さず、徒らに支離滅裂の断章を連ねてしまつた。しかし、そが先生を悼む私のいつはらざる氣持である。先生の尊靈、こひねが尚はくは饗け給はんことを。

佐藤先生を偲んで

昭和二十七年卒業生
目黒区立第一中学校勤務

西 幸 保

佐藤先生が大学へ復帰されてから、私は研究室で専ら御指導をいただき、又先生のお人柄に直接に接することができました。当時は歴史科生が十人たらずでしたが、何時も研究室で学生と接触されました。先生が力強く机をおさえながら、元気に話されることに時間を忘れて聞き入ったことが多くありました。

三七年の秋だったと思いますが、駒大の新校舎落成の時、久方ぶりに先生にお会いしましたが、その時「大病をしてね、今はお酒は駄目でもっばらジュースで……」と話されていましたが、それでもとてもお元気そうでした。大病をも克服されて、遠方のお宅からお元気にしかも御熱心に大学へ出られていた先生の突然の死は、全く信じられませんでした。

事故の次の日、前に研究室の助手をされていた藤井先生と一諸に、先生のお宅へお悔みにお伺いしました時、事故のあった所を通りましたが、事前の周囲の人達によって防ぐことができなかったのかしらと本当に残念に思われてなりません。奥様のお話によりまして、日頃から又大病をした時も先生は、「どんなに苦しい思いをしても生きていけば、必ず楽しいこともあるのだから生きていなければ……」と話され、又最近は一あと一回卒業生を出したら、大学をやめて……」今までの研究を整理しながら余生をおくることを楽し

みにしておられたそうです。

このような力強く、しかも人間味あふれた先生の信念は永い間の学生指導にも、又終生一日の楽しい思い出を歌によまれつけられたこと等にもよく感ぜられます。

一途に御自分の研究をつづけられ、力強く生きられ数々の業績を残された佐藤先生、今は亡く、ただただ心より先生の御冥福をお祈り致します。

回 想

昭和三十七年卒 阿 彦 哲 郎

三月十五日、卒業式も終り学内も閑散としておりました。午後五時頃だったと思います。二、三の親しかった後輩を想い何か感傷的な心で机の上を整理しておりますと電話がなり「こんな時間に電話をするとは非常識な……」と思いながら受話器をあてた時、事実でなくてほしい佐藤先生の事故死を知らされた。直ぐ阿部先生に連絡を取ると共に同僚に他の先生方への連絡をたのみ阿部先生と二人で千葉へむかいました。車中何かの間違であってほしいと願いながら八時頃佐藤先生宅に着きました。先生は式に参列された姿のままに今にも床を離れ好きな宮本武蔵でも話しそうな様子でした。

私は先生と特別にこれといった関係はございませんが、強いて云

うならば三年の時「西洋史演習」で先生一人に学生一人といった講義を受けそれが縁で卒業論文の指導をお願いしました。以ともその講義中に「宗教改革が日本に及した影響について説明せよ」ともちかけられた事が直接の原因になっておりますが、それによって私の歴史に関する興味が目覚め疑惑をいだいた事は云うまでもありません。

私が実務に勤めてから隙を見ては良く研究室で雑談を交しました。先生の云う事は何時も定っていて、「宮本武蔵、角力、さもなければ剣道(兵法)の話」最後に「君! 武蔵を研究しなさい、君なら出来る!」「歴史学」の糸口を見出して下さった先生が何でかような事と思いならも「五輪書」を手始めに沢庵禅師の「不時智神妙録」「太阿記」「理記差別論」及「安心法門」等を読み先生と意見を交しておりました。

そして二月十六日、歴史科の謝恩会の席で武蔵の心をつかめたか?」「……わかりません」このような他愛のない話が最後になるうとは夢にも思っておりませんでした。

先生が他界されてから一ヶ月も過ぎた四月の末頃朝日新聞に「武道初心集」なる本が紹介されていた、何か共通な事があると思ひ早速取寄って読んでみた。そしてその編集後記に武士道研究者としての佐藤堅司先生を知らされた、と同時に先生の云う武蔵は、実は武蔵その人でなく「武士道の研究」にあったのです。

「武士たむものは、正月元旦の朝、雑煮の餅を祝ふとて箸を取る初めより、其年の大晦日の夕べに至るまで、日々夜々、死を常に心あつるを以て、本意の第一と仕り候」又「葉隠の武士とは死ぬことと見つけたり」

現代に於てはあたかも旧代の遺物のごとく解釈されがちな言葉であるが、山鹿素行の死を「全道に守る」即ち道のために命を捨ててかえり見ない、といったような強い意志力を養うことを教えていると思います。

先生が私達に残された「学とは永遠のわざおこたらず生命の限りつとめる励め」この歌を傷つけぬよう努力しようと思っております……。

佐藤先生について

思い出される事

三十七年卒 齊藤 勢 吾

先生が交通事故で亡くなられた。私には信じられない事であった。長い闘病生活に耐えぬかれ、ようやく元氣をもち返し、俳句の数も目的に近づいたと賀状によって知らされた矢先であった。人生の終極がこんなに突然に訪れるものかと亡き先生も地下でなげいておられるのではないだろうか? と言うのも古来その生命を全うして世を去った人間は少いと云われて来たけれども先生もその御一人のような気がしてならない。いや私はその人間の業績とか人格を云々しようとするのではなく、人生を通して大きな希望を抱き、又未来の世界、文化に光を投げかけよとする人間が目的を達せずして世を去る。私は先生の不慮の死をこんな風に考えその死を強く悼んでお

ります。

今考えますと、先生の夢は「巨大な物」「ばかでない物」にあつた様に思う。ある秋の日、盛君川崎君と一諸に先生のお宅をお訪ねした事がありました。その時先生は、江戸時代の国学者、佐藤信淵について話され、信淵を御自分の祖先の様に称え、敬い、信淵から由来する東京湾埋立計画及びそれに附随した検見川附近の農村の貯水や灌漑等の総合的な治水に関する先生の着想等をスクラップや図面を見ながらお聞した事がありました。しかしその計画は實際のことを申しますと、我々には「半理想的」なものでしかありませんでしたがその巨大さに驚かされた事は事実です。更にこのような先生の考え方を通して私は歴史学者としてよりも社会思想家としての先生の方が強く印象に残っております。しかし先生の「巨大な物」への夢は単にそればかりではなかった様に思います。この事は歴史学者としての先生が端的に現れて来る事になりますが、歴史を通して現れて来る古今の巨人達に両手を挙げて讚美し、惜しげもなく拍手を送り、そして、それに同化しようとなされた先生の姿も覚えております。先生の講義の圧巻は何と言いましてもルネッサンスと革命史にあつたと私は思っております。革命——先生はそれを歴史の流れにおける、大波、大激、大変化と説明された事をノートしております。又ルネッサンスが狭義の文化史における革命だとすれば、先生の講義の中で強く印象に残るのは、歴史と革命は密接な関係にある事は当然としても、その革命自体が歴史学における「巨大な物」であつたと云うことである。そして、さらにこの「巨大な物」は人間界において、数々の巨人達を生むのである。ダンテの巨人さは「葛藤」にあり、ダビンチの巨人さは「普遍人」にあり徳川家康の

巨人さは「忍従」にあり、さらに宮本武蔵の巨人さは兵法者としてより、劔により覚悟した「聖人」にある。さらにボッチェリク、ロムウェル、ロベスピエール、ワシントン……先生はこれらの一連の巨人達に接する時、すでに客観的思考を離れ、「巨人達」に陶醉した主観的思考であつたとさえ思われる程でありました。これらの事を考えると時、先生はこの歴史の巨人達に対して強いあこがれをもたれていた様に思われます。

昨年「歴史教育」二月号に「津田史学と津田精神」という先生の論説がのっておりますが、その中で天皇制に対する強い支持を述べておられました。この事も天皇の日本における歴史的地位を強く主張され私流に解釈すれば、先生にとっては天皇制は「巨大な物」であつた様に思っております。この事は私にとって多少の疑問は残るにしても「巨大な物」へのあこがれは死の直前までお持ちになつた事、又それを同化なされようとした先生のお姿が思い出される時、私はもう一度先生のお話をお伺いしたいと思う気持ちが一段と強くなつてきます。

長い人生の旅路を教育というむずかしい分野で活躍された先生に報いる為にも我々は先生の夢に一步でも近づくべく努力しなければならぬのではないのでしょうか？

先生、私の知っている先生のお姿は確かに老人でありました。しかし先生のお心持にはそのお姿をふきとばすような若さをお持になつている事も知っております。先生のお姿は私にとって「巨大な物」であります。

先生、永遠に安らかにお眠り下さい。

恩師の死を悼む

昭和三十八年卒 久間泰瑞

思わぬ訃報、先生の他界、私は自分の足下に奈落を感じ、量り知れない孤独感に襲われた。慈愛にみちたムチを与えて下さった偉大なる指導者を失ってしまったのである。呆然自失たる私ではあるが、先生の御冥福を祈りつつ、筆をとることにしたい。

良き師は、つねに友情の如きものをもって弟子を遇するものだと云われる。卒直にいつて私はその恩恵に浴することができた。真理のはるけさとその柔軟な浸透を期してくれた。恩情にただただ頭が下がるのみである。

私は、千葉市に住んでおられた先生をよく訪ね、貴重なお話を数時間にわたって拝聴することができた。「孫子の兵法」、「ルネサンス」、さらには「佐藤信淵」……と尽きることのないお話にいつも充実感を覚えると共に、学問の深さ、きびしさを無言のように教えられたような気がする。研究の要諦は博約にありとする先生のお導きを忘れることができない。

私の最大の苦痛は、努力をおこたり、空虚な日々を送っている時に先生に接することであった。研究のこと、人生のことについて諄々と説いて下さる先生を思う時、いつも「頑張らねばならない」という気がおこった。いわゆる真のきびしさを与えて下さったのだと思っている。

私は先生に死滅はあり得ないと考える。先生の残された御研究の中に今でも生きて信じて疑わない。数十年にわたって、駒沢の学生を指導して下さった情熱と真摯な学究的態度に感謝して、卒業生、在学生ともに先生の真意を顕現すべく努力しようではありませんか。

私は先生に親灸して教えをうけたということに対して、限りない喜びと誇りを持っている。最後に、先生から賜わったもので、私の信条としている一文をあげて、佐藤堅司先生の御冥福をお祈りしたいと思う。

「一人の生涯の力を以ては、ことごとくはその奥までは究めがたきわざなれば、その中に主（むね）としてよるところを定めて、かならずその奥をきわめつくさんと、はじめより志を高く大にたてて、つとめ学ぶべきなり」

歴史科四年 中村伍郎

佐藤先生がお亡くなりになって、もう半年になってしまいました。ほんとうに月日が過ぎ去るのを早々と感じた次第です。私が先生に最後に御会したのは御亡くなりになる一週間前のことでした。その時の御元氣な先生を今までもはっきりと覚えています。先生が不慮の事故にあはれた、その当夜、私は偶然にもこの駅で乗車したのでありますが、今思いますには私自身複雑な気持です。

私が初めて先生に御会したのは三六年の新入生歓迎の日でした。その日私は車中で先生の話しを聞きながら帰宅した事を思い出しま

す。私が先生に公私ともども御世話になりましたのは数年間ではありましたが、昨年図らずも先生の授業を受ける機会に恵まれました、私が一番印象に残った授業は西洋史演習です。この授業は先生を合せてわずか四人の授業でしたが、私はいつも勉強不足で先生の授業を受ける事がしばしばであり、先生もほとほと困った顔をされたのを覚えています。先生は授業中に郷土の話をしをされる事があり、先生の御生れになった千葉県印旛沼近郷の歴史を詳しく話される中で、印旛沼開拓の歴史を私は聞きながら、先生の御両親は農業をされていた事を思うに、先生は郷土の「土」に非常な感着を持っておられたのだと思います。前日先生の御宅に訪れる機会があり、家族の方から予てより先生が念願されていた。「はず」の記念碑が完成した事を聞き、この碑は先生がどんなに心待ちにされていた事かと思えますと、先生のご事情がしのばれてなりません。それから先生は駒沢大学歴史科発展の為、なみなみならぬ御苦心をされた事を記憶せねばなりません。これにはどのような感謝の言葉を以っていい表わす事が出来るものではありません。それには自己の道を一步一步堅実に歩む事が、先生への御返しではないかと思えます。

佐藤堅司先生追悼

大野 達之助

本会の会長佐藤堅司先生は昭和三十九年三月十五日夕、御自宅の

近くの新検見川駅の国鉄踏切で警手の不注意から電車に接触されて不慮の死をとげられた。享年七十三才。

当日は本学の卒業式であったので先生は元気なお姿で臨席され、岩井先生と並んで最前列に席を占められていた。式が終ってから例年の通り講師室でお祝のささやかな昼食が出されたので、私は先生と一諸に盃を二三杯かたむけ、雑談をしていたが、その際先生は特に歴史科の人事について最近あったことを打ち明けられ、胸に納めておいてくれと依頼された。これが先生の遺言になろうとは本当に感慨無量である。私が先生の後任を承まわったからは先生の御遺志にそうように努力したいと思っている。

私が先生の御近づきを得たのは、私が本学に移った昭和三十三年からであって、その年の入学式に当時文学部長であった岩井先生に引廻されて各先生方に紹介されたが、丁度その日は佐藤先生はお休みなされたので、初めて先生にお目にかかったのその後研究室に行ったときであった。私はそれまで先生を存じあげなかったもので、先生の方からこれが新任の教師だと推量されたらしく、親しみをこめて声をかけて下さったのには恐縮した次第であった。そのころすでに本学を退職されていた丸山二郎さんには前々からお世話になっていて、よくお宅へ伺ったことがあるが、駒沢の話が出るといつも先生の人柄をほめられて、ほかのものとはかくも一度佐藤さんには会ってみたいと言はれていたもので、先生のお人柄については丸山さんの思ひ出話を通して想像していたのであった。それがいよいよ本学の専任になって先生の御指導をうけるようになり、直かに先生の警戒に接するようになると、丸山さんの言はれたことが一々裏書されるように感じた。

先生はいつも温容をもって私どもに接し、話題が相模のことに及ぶと熱をおびてこられ、身振りをまじえて相模の手や鼻眞力士の得意技などを披露されたものである。先生の相模ずきは天下周知のことで、本学でも相模部長をつとめられ、本場所がはじまると学校からの帰途、よく渋谷辺で一杯やりながらテレビを御覧になっていたようである。お酒の方は一昨年夏腎臓を患わられてから昨年は駒沢史学大会の懇親会や卒業生の謝恩会などに御出席にならなかつたが、本年は謝恩会に元気なお姿を見せ、卒業生に将来進むべき道について最後の訓戒を与えられていた。また歴史科は西洋史を専攻する学生が少ないが、時々優秀な学生が出て優等生になることがあった。そういうときは先生の喜びようは大変なもので、孫を慈しむように深い愛情をもってよく面倒を見られた。本学の歴史科が世間によくあるように感情的な対立がなく、研究室を中心によくチームワークがとれているのも、先生の温和な中にも筋はあくまで通すという御人柄の感化によるところと思っている。その先生は人生の無常を感じさせる如く、一瞬の事故によって永遠の眠りにつかれたのである。

御葬儀は三月二十一日、千葉市花園町の御自宅において、泰福寺住職影山堯雄師導師のもとに執り行われた。本学からは総長代理藤田俊訓学監をはじめとして杉岡規道文学部長、岩井大慧、宮崎晴美、小山鞆絵の諸先生、阿部肇一助教授、講師として生前先生と親交のあった法政大学の竹内直良先生、専修大学の渡辺茂氏、東京大学史料編纂所の小西四郎、玉村竹二、今枝愛真の諸氏、それに先生の関係された各学界の代表が多数参列焼香された。また当日は卒業式の終わった後ではあったが、歴史科の卒業生は多くが帰郷を延ばし

て残留し、在学生や先生の恩徳を慕って地方から馳せつけた同窓生と一諸になって葬儀のお手伝をしていた姿には心が打たれた。先生の戒名は本猷院惟毅日堅居士といい、御遺骨は茶毘に付されて市川市高石神の泰福寺に埋葬された。

(文学部教授)

駒 沢 大 学

本 校
 東京都世田谷区深沢町
 北 海道教養部緑が丘
 岩見沢市

大学院（修士・博士課程） 試験日 3月29日

人文科学研究科

学 部

仏 教 学 部 禅学科・仏教学科

法 学 部 法学科

商 経 学 部 商経学科

文 学 部 地理歴史学科・国文学科

哲学科・英米文学科・社会学科

商経学部第二部

短 期 大 学 仏教科

国文・英文・(女子)

昭和40年度開設

苫小牧駒沢短期大学 (女子)
 岩見沢駒沢短期大学 (女子)

3月1日